

08  
*Drawings & Photographs: The Dishes*  
Lai Yu Tong  
Lai Yu Tong, 2018

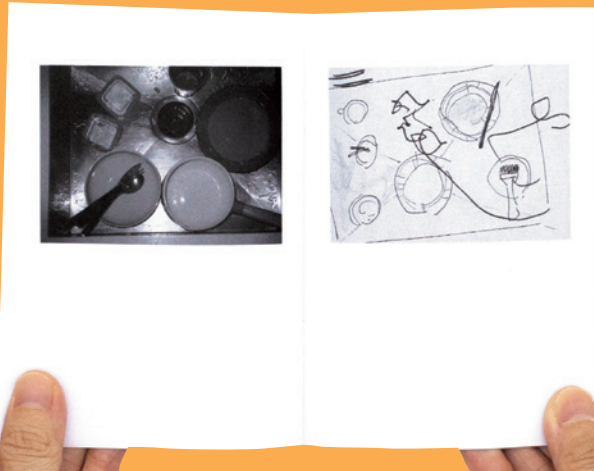
作者にとってパートナーとシェアしているアパートにある食器はインスピレーションの大きな源のひとつである。彼はある日、食器は立派な静止画にもなると気づいた。そこで、毎回洗う前に食器を撮影することにし、それを約1か月続けた。その後、撮った写真を見て絵を描いた。ZINEのレイアウトができた後、パートナーと一緒に写真や絵を見て、それぞれの食器で何を食べたり飲んだりしたかを思い出した。その結果、彼らはバターやジャムを塗ったパンをたくさん食べ、たいてい牛乳をたくさん飲んだことがわかった。

The dishes in the apartment that the author share with his partner is one of his biggest sources of inspiration. he realized one day that it also made for good still life compositions. So he decided to photograph the dishes each time before washing them and to continue this for about a month. he later making drawings of them.

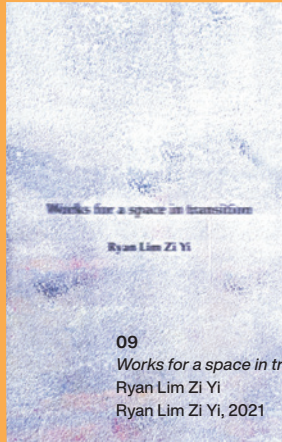
After laying out the zine, he and my partner then tried to recall from the images what they had eaten or drank from these dishes. It turns out that they were eating a lot of bread with spread and I mostly drank a lot of milk.



08



09



2021年1月から2月の2か月間、作者は友人が次の家に引っ越すまでの間、引っ越し前の友人の家で作品を展示することを提案された。その展示をもとにつくった本。

The artist was invited by a friend to exhibit his works in a home that they were moving out of for two months from January to February 2021. this book is based on that exhibition

10  
*a pocket dictionary of things misunderstood*  
Genevieve Leong  
Genevieve Leong, 2021

ジュネーブ・レオンのアート作品では、つかみどころのないものの可視化を試みている。無形のものに始まり、テキスト、画像、見つけた物、つくった物、空間を巧みに組み合わせ、「ほぼ有形のイメージ」とレオンが表現する作品を生み出し、自身の感情や感覚や気づきに新たな光を当てている。

Genevieve Leong's art practice attempts to visualize the intangible. Beginning with the immaterial, her work often combines text, image, found and made objects and the manipulation of space to create what she describes as "an almost physical image". Her work seeks to shed new light onto her emotions, sensations, and realizations.



10



008



## テンポラリーな本 の 場所としてのアートブックフェア

文 | イム・ギョンヨン

近年、アジアのブックフェアは熱気に満ちている。2008年スタートのUNLIMITED EDITION (韓国) やTokyo Art Book Fairなど先発のアートブックフェアが安定的な開催を続ける一方で、2015年前後を境に、各国の大小さまざまな都市で特色のあるフェアが誕生していった。アジア圏での印刷産業の技術向上や、アート・デザインの市場としての盛り上がりを背景に、質の高いアーティストブックも増えている。そんなアジアの状況について、ここではソウルの書店兼プロジェクトスペースThe Book Societyを主宰するイム・ギョンヨンに執筆を依頼した。自らもアーティストブックの出版・販売を行う傍ら、ヨーロッパのアート・デザイン本を積極的に輸入・紹介してきた彼の視点を軸に、アジアのシーンの現状を俯瞰する。

アートブックフェアは実に不思議な場所だ。誰もがモニタを眺めているデジタルとインターネットの時代に、アートブックフェアでは実物の本を手にとることができるし、モノとしての本の価値や可能性を変えてみることもできる。毎年3〜4日にわたって開催されるアートブックフェアには、私たちがふだん本の売買を行う一般的な書店とは違う、独自の役割や意味がある。ほとんどのアートブックフェアが、アートブックというコンセプトを守りながら、モノとしての本がもつ物理的な特性を高めて、出版の主題や形態、内容の多様化に大きく貢献している。その結果、アートブックフェアは、アートブックというものをリトルプレスやデザイナーズ出版、ZINEを中心とした政治パンフレットの領域にまで広げ、本を消費財に発展させて、文化的・社会的な役割を与えた。規模を重視する出版市場とはかけ離れた存在だ。時代錯誤とも思えるこうしたブックフェアが、世界の主要都市で急成長している。

この寄稿では、まずアジアにおけるアートブックフェアについて紹介し、コロナ禍後の状況を予想する。アジアに限って言えば(アジアの概念が非常に曖昧ではあるが)、アートブックフェアは2000年代の初期から中期にかけて、東京、ソウル、台北の小さな出版コミュニティで始まり、ここ数年で香港、シンガポール、シャルジャ、メルボルン、北京、上海、クアラルンプールといった大都市に広がった。これらのアートブックフェアには、開催される土地の社会文化的感覚や主催者が選ぶテーマによって、それぞれ異なるアイデンティティが表れている。

2019年、The Book Societyはアジアの8つのアートブックフェアに参加した。香港、シンガポール、上海のUNFOLDとabC、釜山、台北、ソウル、シャルジャ。どれも、NY Art Book Fairなど草分け的存在のアートブックフェアに比べるとディスカッションなどの活動は少なかったものの、展覧会やトークプログラム、ワークショップなど、さまざまな企画で大いに賑わった。そして、開催都市の社会文化的な特性を通して、アートブックフェアの新しいビジョンを提示していた。

ビエンナーレのような国際的な展覧会やプロジェクトは公的資金が投入されるため国や都市のアイデンティティをはっきりと打ち出す必要があるが、こうしたアートブックフェアは多くのテーマが介在できる新しい空間をつくりだし、既存の国家倫理でも、言語的な境界や経済などでもない、アートブックの視点に基づいた新しいアイデンティティを形成している。また、アートブックフェアでは、すでに専門家で

ある人々ではなく新世代が対象となることが多く、それまで発言権のなかったさまざまな人やコミュニティのための場となっている。

大きな予算を必要とするアートブックフェアの性格上、当然ながら公的機関や企業のネットワークもそれぞれの文脈の中で複雑に絡み合っている。香港のアートブックフェアBOOKEDを主宰する大館(Tai Kwun)は、香港政府と香港ジョッキークラブが運営する非営利団体だ。また、中東唯一のアートブックフェアFocal Pointは、シャルジャビエンナーレの主催者でもあるシャルジャアートファンデーションが主催する。公的機関がアートブックフェアの主要パートナーや主催者となる状況は、アートブックフェアを単なる本の売買の場ではなく、知識の生産と流通の場に行っている。

ヨーロッパのアートブックフェアが、現在の出版ムーブメントを文化的遺産に基づいた“実践としての出版”として概念化しているのに対し、アジアのアートブックフェアはそれぞれの文化的背景に基づいた独自性を打ち出そうとさまざまな取り組みを行っている。もちろん、アートブックフェアが開催される都市はどれも現代の感覚では国際都市と言えるが、アジアは今も現代と前近代の要素や民族主義・専制君主が絡み合っている地域なのだ。

そのため、アジアの国際都市は地域の事情や情報を欧米に向けて発信する一種の情報都市として重要な役割を果たしていて、シンガポール、香港、シャルジャといった都市でのアートブックフェアの活性化もその文脈で理解することができる。Singapore Art Book Fairは、シンガポールだけでなくマレーシア、インドネシア、ベトナム、フィリピン、タイなど、東南アジア各国におけるリトルプレスのムーブメントを理解するうえで重要な場所だ。さらに、Hong Kong Art Book Fairは、抑圧下にある香港の政治的緊張をリトルプレスの形で写し出している。

香港の出版コミュニティZINE COOPは、2020年のHong Kong Art Book Fairで、世界中のジンスター(ジンをつくる人)から送られた香港の民主化運動に関するジンを集めたBurning IXXUES(自由之書)プロジェクトを行った。このプロジェクトは、民主化デモに対して香港政府や中国政府がとった公式方針に対する抵抗が基盤になっている。欧米諸国には市民が政治的意見を表明する場所が数多くあるが、中国やベトナム、シンガポールなど出版物の検閲が今も行われている国において、アートブックフェアは政治的発言に適した数少ない場所だ。

それに加えて、近代以降、地域ごとに異なる発展を遂げてきた出版文化についても考慮する必要があるだろう。ヨーロッパや北米の国々は、出版を通じて新しい知識を生みだし、それを広め、現代の知識をつくりあげてきた。アートブックについても同様で、アートブックの制作や流通のフローは、美大や出版社、流通業者、書店、アートブックフェア、芸術団体や芸術施設のあるヨーロッパと北米が中心だ。こうしたフローが、欧米はアートブック制作に関して恵まれた場所であるという印象をわたしたちに与える。一方、アジアではそうしたフローが弱く、そのため出版物から地域の事情や情報をあまりうかがい知ることができない。その結果、場合によっては、アートブックフェアが実験や反権威主義の場となり、印刷物を通じた政治的主張が行われる。Burning IXXUESは、香港の政治情勢に関する世界



中のジンスターたちの連帯を示すプロジェクトだ。

従来のアジアの概念が国家・民族・言語の“違い”によってつくられているのなら、アートブックフェアを通して私たちが体験する地理的な概念は、格安航空会社やInstagramなどたくさんの（非）物質的交流によってつくれている。実のところ、こうしたネットワークがつく世界は決まって魅力的だ。アジアのアートブックフェアが世界のどの地域よりも活気に満ちているのは、アジア自体がとても複雑で矛盾のある場所だからである。

コロナ禍によって、この世界は平等ではないことにわたしたちは気づかされた。国境の閉鎖は移民や開発途上国の人々にとってより厳しい状況を生み、「ワクチンパスポート」のようなシステムは十分なワクチンが確保できる先進国の人々にとってより有利だ。コロナ禍の影響を受けた資源のコントロールや分配も同じで、強国にとって有利な方法で行われた。とにかく、本にまつわるさまざまなプロジェクトや展覧会、フェアは中止され、特にアートブックフェアは中止かオンライン開催になったものが多かった。

香港のグループDisplay Distributeは、アジアで作られるリトルプレスを販売し、「ライトロジスティクス」という個人間のネットワークを使って購入者に届けるというプロジェクトを行っている。たとえば、サンフランシスコに住んでいる人から香港で出版された本の注文が入ると、サンフランシスコへ行く人にその本を託して届けてもらう。この販売方法が成り立つのは、リトルプレスの経済が個人間のネットワークを通して築かれているからだ。ところが、国境を越えた移動ができなくなると、この経済が正常に機能しなくなる。コロナ禍という状況によって、人と人とのあいだに生まれる偶発的なつながりの限界が浮き彫りになった。

コロナ禍後のアートブックフェアはどうなるのだろうか？ 多くの出版者や読者が集まって本を売買するマーケットとして、アートブックフェアが活気を生む場所であることはすでに証明されている。それに、わたしたちはアートブックフェアを経験して、本に関するさまざまな実験や試みが可能であることを知っている。しかしコロナ禍によって、そうしたことが常にできるわけではないことが判明した。ニューヨークで書店やアートブック出版社を運営するPrinted MatterはPrinted Matter's Virtual Art Book Fairと題したオンラインアートブックフェアを開催したが、これはコロナ禍後のアートブックフェアの開催方法としてはおそらく適さないだろう。アートブックフェアは、そもそもオンライン空間とは違う「本のある場所」としてつくられたものだから、コロナ鎖国が解かれたら実際に現地へ行って交流したいという欲求が高まるはずだ。では、わたしたちはコロナ禍以前の状態に戻るのだろうか？ ふたたびアートブックフェアが開催され、本を売買する人が増えていくだろうか？

ここで考えるべきことがいくつかある。Zoomのようなバーチャル空間が物理的な教室に取って代わるように、バーチャル空間が本をつくったり読んだりする方法に影響を与えると仮定し、それを前向きに探ってみるのはどうだろう。もちろん、これは人やコミュニティをつなぐネットワークは物理的なものばかりではないという事実を踏まえたうえでの話だ。実のところ、わたしたちが見落としているのは、わたしたちの生活は依然としてグローバル企業や政府が主導する資本やシステムに従属させられているという点なのだ。

2021年にスエズ運河で起きた座礁事故は記憶に新しい。あの事故のために世界中で必要な物資の到着が遅れ、一隻の大型コンテナ船が世界の物流に与えた影響の大きさに驚かされた。この状況は何を示しているのだろうか？ それは、誰かの些細なミスが世界の大半の地域のロジスティクスを停止させる可能性があること、そして自由に見えるグローバル資本主義を支えているのはコンピュータ上でやり

取りされる数字ではなく、物理的な実態をもったモノであるという事実だ。

実のところ、アートブックフェアは脆く不安定な基盤の上に成り立っている。コロナ禍が収束すればアートブックフェアも再開されるだろうが、その際は国境や文化を越えて機能する経済について考える必要がある。もちろん、これは盤石なシステムを構築したいという意味ではない。もっと現実的に、アートブックフェアで本を売る出版者やアーティストは、そうした活動を自分たちの地域でも続けられるようにする方法を考える必要があるということだ。また、Hong Kong Art Book Fairを例に、政治的活動の場としてのアートブックフェアに変わる方法には何があるかを考えることもできる。アートブックフェアが有名になって参加者が増え、メディアに取り上げられるようになると、抵抗の場が減っていくからだ。ここで、ひとつの方法としてSingapore Art Book Fairの取り組みを見てみよう。Singapore Art Book Fairでは2021年から、国内と国外の出版者がベアでひとつのブースに展示するというマッチングプログラムAdopt-an-Exhibitorを行っている。この試みは、同じような方向性をもつ出展者を結びつけるとともに、それ自体がアートブックフェアにさまざまな意見や考え方を注入する役割を果たしている。

Display Distributeが個人間のネットワークを通して示した偶発的に生まれる連帯感、非常に重要だ。それこそが、アートブックフェアがこれまで生み出してきたものであり、アートブックフェアを動かす力になっている。また、こうした偶発的な連帯感により、「アジア」とはわたしたちに与えられた物理的な空間ではなく、実際の交流を通して常にその意味を定義していける場所であることがわかった。とはいえ、コロナ禍によって、わたしたちはこの「本の場所」について考え直す必要ができた。皮肉なことに、アートブックフェアが機能しなくなったとたん、こうした「テンポラリーな本の場所」についてより真剣に考えられるようになったのだ。この開放的な本の場所をどうしたら日常生活の中で維持していくことができるだろうか？ この本の場所で起きるさまざまな実験や自発的な動きを他の本の空間に広げていくにはどうしたらいいだろうか？ 恐らくそういったことを、アートブックフェアはわたしたちに問いかけているのだろう。

#### イム・ギョンヨン

2007年に小さな出版社mediabusを共同設立。2010年には書店兼プロジェクトスペースThe Book Societyを共同設立し、アートに関する本や多種多様なテーマの自主制作本の紹介を行う。Artists' Documents: Art, Typography and Collaboration（共同キュレーター、韓国の国立現代美術館、2016年）やSeoul Mediacity Biennale 2018（共同ディレクター、ソウル市立美術館、2018年）など、出版に関する展覧会やプロジェクトのキュレーションも行っている。訳書に、『Post-Digital Print』（アレクサンドロ・ルドヴィーコ著、mediabus刊、2017年）がある。<https://mediabus.org>



2021年3月24日に人工衛星によって撮影されたスエズ運河上のコンテナ船「エヴァー・ギヴン」Container Ship 'Ever Given' stuck in the Suez Canal, Egypt - March 24th, 2021（出典： [https://en.wikipedia.org/wiki/2021\\_Suez\\_Canal\\_obstruction#/media/File:Container\\_Ship\\_'Ever\\_Given'\\_stuck\\_in\\_the\\_Suez\\_Canal\\_Egypt\\_-\\_March\\_24th\\_2021\\_cropped.jpg](https://en.wikipedia.org/wiki/2021_Suez_Canal_obstruction#/media/File:Container_Ship_'Ever_Given'_stuck_in_the_Suez_Canal_Egypt_-_March_24th_2021_cropped.jpg)）

## The Art Book Fair as temporary book space

Text by LIM Kyung yong

The art book fair is quite a strange space. In the era of digital and internet, where everyone is looking at monitors, it is a place where you can experience books as original objects, and it is a place where you can try to renew the value and possibility of books as objects. The art book fair, which is held for three to four days every year, has its own role and meaning, different from the bookstores where we traditionally buy and sell books. Most art book fairs contribute greatly to diversifying the subject, form, and content of publication while preserving the concept of an art book with enhanced physical properties of books as objects. As a result, the art book fair expands art books to the realm of small-scale publications, designer publications, and political pamphlets centered on zine, and expands books as consumer goods, giving them cultural and social roles. It is far from the scale-oriented publishing market. These fairs, which seem anachronistic, are growing rapidly in major cities around the world.

This essay starts with the story of the art book fair in Asia and tries to predict the situation after the pandemic. If we think of it limited to Asia (although the concept of Asia is very vague), the art book fair was started by small publishing communities in Tokyo, Seoul, and Taipei in the early and mid-2000s and has expanded over the past few years to major cities such as Hong Kong, Singapore, Sharjah, Melbourne, Beijing, Shanghai, and Kuala Lumpur. These art book fairs reveal different identities according to the socio-cultural sentiment of the city or the subject who organizes the event.

In 2019, The Book Society participated in 8 art book fairs in Asia. They are Hong Kong, Singapore, Shanghai UNFOLD and abC, Busan, Taipei, Seoul and Sharjah. Although discursive activities were not as active as in pioneering art book fairs such as NY Art book Fair, they were all very dynamic with various programs such as exhibitions, talk programs, workshops. They presented a new vision for art books through the socio-cultural specificity of the city where the art book fair is held.

On the other hand, unlike international exhibitions and projects such as the Biennale, which rely on public funds and have to clearly reveal the identity of the country or city, these art book fairs open up new space for more subjects to intervene and thus, forming a new identity according to the perspective of the art book instead of existing national ethic, and language-based boundaries and economies. In addition, in the art book fairs, new generations often become subjects instead of existing experts, and it has become a space for various subjects and communities who didn't have voices before.

Of course, due to the nature of the art book fair, which requires a large budget, the networks of public institutions and companies are also complexly intertwined within their respective contexts. Tai Kwun, the organizer of the Hong Kong art book fair BOOKED, is a non-profit organization run by

the Hong Kong government and Hong Kong Jockey Club, and Focal Point, the only art book fair in the Middle East, is also hosted by the Sharjah Art Foundation, which also organizes Sharjah Biennale. The situation in which a public institution becomes an important partner or host of the art book fair makes it not merely a marketplace for buying and selling books, but a place for producing and distributing knowledge.

While European art book fairs conceptualize the contemporary publishing movement as 'publishing as practice' based on their cultural legacy, Asian art book fairs are making various efforts to develop their uniqueness based on each cultural context. Of course, all the cities where the art book fair is held are close to cosmopolitan in the modern sense, but Asia is still a complex region where modern and pre-modern elements, democracy and dictatorship are entangled.

Therefore, the role of Asian cosmopolitans as a kind of information city that transmits regional information and knowledge to the West is important, and the activation of art book fairs in places such as Singapore, Hong Kong, and Sharjah can also be understood in that context. The Singapore art book fair plays an important role in understanding small-scale publishing movements not only in Singapore but also in Southeast Asia, such as Malaysia, Indonesia, Vietnam, the Philippines, and Thailand. In addition, Hong Kong art book fair reproduces the repressed political tensions of Hong Kong in the form of small-scale publications.

Hong Kong-based publishing community ZINE COOP presented a project called Burning IXXUES at the Hong Kong Art Book Fair in 2020 that collected zines sent by zinesters from around the world about Hong Kong's democratization protests. This project is based on resistance to Hong Kong's official attitude toward democratization protests held by the Hong Kong or Chinese governments. In Western countries, various places for citizens' political expression are in operation, but for countries such as China, Vietnam, and Singapore where print censorship still exists, the art book fair is ideal and a rare place for political speech.

At the same time, it will be necessary to consider the publishing culture that has developed differently regionally since modern times. Countries in Europe and North America have been producing and distributing knowledge through publishing and producing modern knowledge. The same goes for art books, the art book production and distribution circuits are centered in Europe and North America, with art/design schools, publishers, distributors, bookshops, art book fairs, and art institutions. This circuit they create makes us imagine the West as a privileged location for art publishing. However, Asia has a relatively weak circuit, and as a result, it is not easy to obtain information and knowledge of the region from publications. As a result, in some cases, art book fairs become places of experimentation and anti-authoritarianism



as well as political statements through printed matter. Burning IXXUES is a project that shows the solidarity of zinesters around the world about the political situation in Hong Kong.

If the traditional Asian concept is constructed through national, ethnic, and linguistic “differences,” the geographical sense we experience through art book fairs is created by numerous (non)material exchanges such as low-cost airlines, Instagram. In fact, the landscape created by these networks is inevitably attractive. Asia’s art book fair is more dynamic than any other region in the world because Asia itself is a very complex and conflicting space.

The pandemic has reminded us that the world we live in isn’t equal for everyone. Border closures are harsher on immigrants and people from underdeveloped countries, and systems such as “vaccine pass” have been more favorable to people in developed countries with sufficient vaccines. Control and allocation of resources due to the pandemic were likewise done in a way that favored the great powers. Anyway, various projects, exhibitions, and fairs through books were canceled, and in particular, many art book fairs were canceled or conducted online.

Display Distribute, a collective in Hong Kong, is working on a project to distribute small-scale publications made in Asia, especially through a person-to-person network called ‘light logistics’ when delivering them. If someone living in San Francisco wants to buy a book published in Hong Kong, the person going to San Francisco voluntarily delivers the book to the destination. This distribution method works on the fact that the economy of small publications is built through a network between individuals. The problem is that these economies cannot function properly when these cross-border movements are not possible. The pandemic situation has exposed the limits of a more contingent relationship between individuals.

How can we imagine an art book fair after the pandemic? As a market where many publishers and readers meet to buy and sell books, the art book fair proves that it is a place with vitality in itself. At the same time, we were able to understand through the art book fair that experiments and various attempts at books are possible. However, pandemics have proven that such a landscape is not always possible. Printed Matter, a bookstore and artist book organization in New York, has curated an online art book fair under the name of Printed Matter’s Virtual Art Book Fair, but this may not be suitable as a landscape for an art book fair after the pandemic. Because the art book fair has been formed as a book space differentiated from the online space, the demand for physical exchange will increase after the end of the isolation between countries. So, can we go back to the pre-pandemic situation? Will there be more art book fairs again and more people buying and selling books will continue?

There are a few things to think about here. Just as a virtual space such as Zoom replaces a physical classroom, we can assume that the sense of virtual space affects the way we produce and consume books, and we can actively explore it. This is, of course, based on the fact that the

network connecting individuals or communities is not necessarily made in a physical way. In fact, what we overlook is that our lives are still subordinate to capital and systems led by global companies or governments.

We will all remember the accident at the Suez canal in 2021. As a result of this accident, most countries around the world were not properly supplied with the necessary resources, and the impact that one huge container ship had on global logistics was truly remarkable. What did this symptomatically reveal? The fact that someone’s trivial mistake could halt the logistics of a region that occupies a large part of the globe, that what underpins a seemingly free global capitalism is not a figure or flux on the computer, but something that still has a solid, physical substance.

In fact, the Art Book Fair has been operating on a very fragile and unstable foundation. After the pandemic, the art book fair will work again, but it is necessary to think about the economy that operates across borders and cultures. Of course, that doesn’t mean we want to build a system that is very powerful and will never break. More practically, if there are publishers or artists selling books through art book fairs, they will have to think about alternatives to continue these activities locally. Also, as the Hong Kong art book fair showed, we can think about what can replace the art book fair as a place for a political movement. Because as the art book fair becomes famous, more people participate, and the media covers it, the space for resistance may become narrower. Here, we can look at the Singapore Art Book Fair as an alternative. From 2021, the Singapore Art Book Fair has been creating booths together by matching local and international publishers through the Adopt-an-Exhibitor programme. This will connect exhibitors with similar thoughts, and in itself plays a role in injecting various thoughts and attitudes into the art book fair.

The sense of contingent solidarity presented by Display Distribute through the network between individuals is very important. That is what the art book fair has performed so far, and it has been the driving force behind it. Also, through this, we were able to understand that ‘Asia’ is not a physical space given to us, but a place that can be continuously redefined through practical exchanges. However, the pandemic has made us need to reconsider this book space. Paradoxically, the moment the Art Book Fair does not work properly, we can think more seriously about this temporary book space. How can we continue this liberating book space into our daily lives? How can the various experiments and autonomous movements of this space be extended to other book spaces? These are probably the questions the Art Book Fair asks us.

**LIM Kyung Yong**

Co-founded a small publishing company mediabus in 2007. Then in 2010, he co-founded The Book Society, a bookshop and project space where he has promoted books on art and independent publications on various subjects. He has curated some exhibitions and projects about publishing, including Artists’ Documents: Art, Typography and Collaboration (co-curated, National Museum of Modern and Contemporary Art, 2016), and Seoul Mediacity Biennale 2018 (Co-director, Seoul Museum of Art, 2018). He translated *Post-Digital Print* (Alessandro Ludovico, Mediabus, 2017). <https://mediabus.org>

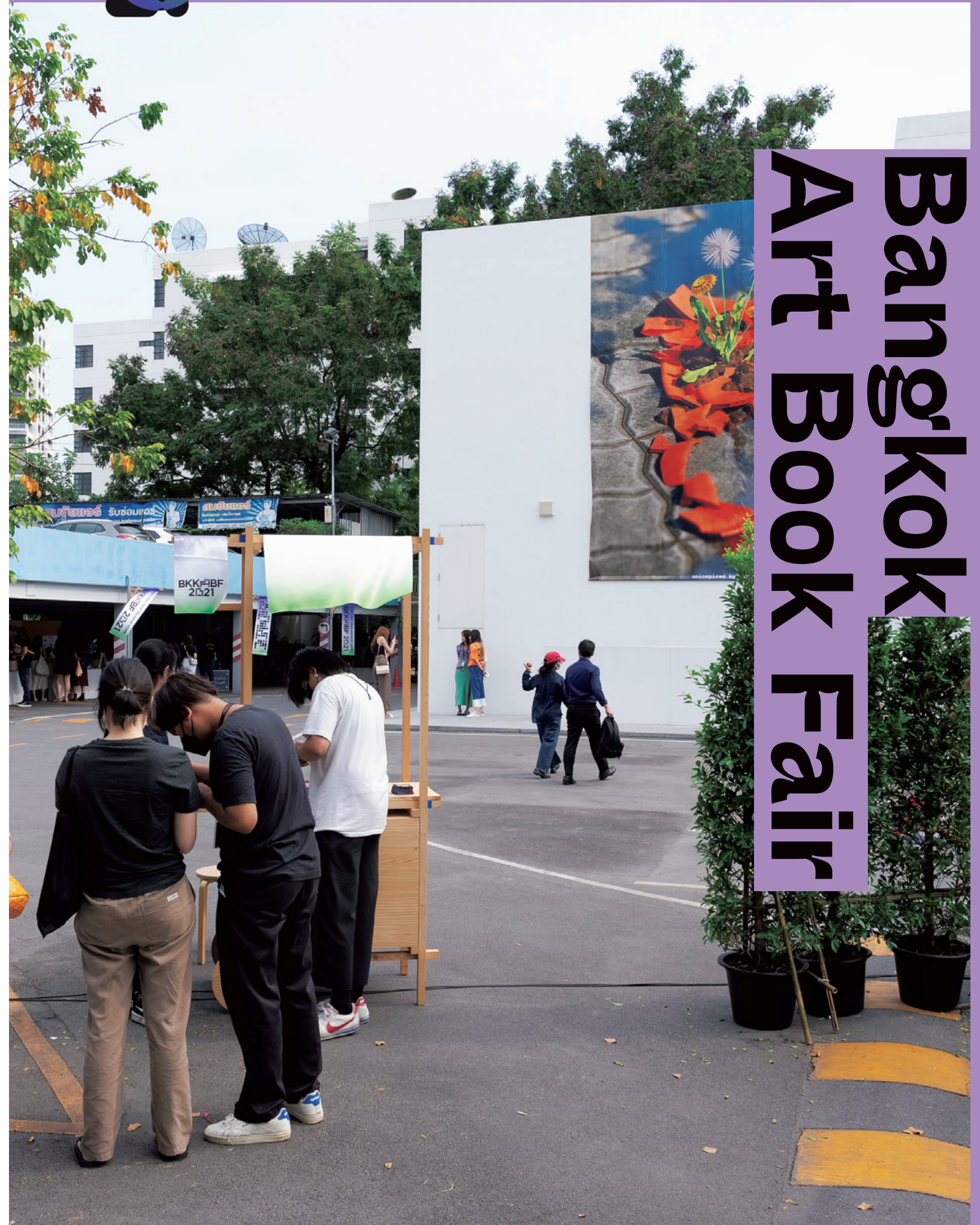


初回開催年 | 2017年  
開催頻度 | 毎年  
開催場所 | タイ, バンコク  
運営組織名 | Bangkok Art Book Fair  
運営スタッフ数 (最新) | 7人

出展団体数 (最新) | 46団体  
来場者数 (最新) | 1,500人  
(2日間, 新型コロナウイルス感染症対策のため入場制限を実施)

Year of first event: 2017  
Holding frequency: Annual  
Location: Thailand, Bangkok  
Name of operating organization: Bangkok Art Book Fair  
Number of staff (latest): 7

Number of Exhibiting Organizations (latest): 46  
Number of visitors (latest): the latest edition for 2 days around 1,500 visitors (limited visitors according to Covid policy)



# Bangkok Art Book Fair